

二・二六事件に就て

河合栄治郎

一

おい

二月二十日の総選挙に於て、国民の多数が
 ファッシズムへの反対と、ファッシズムに対
 する防波堤としての岡田内閣の擁護とを主張
 し、更にその意志を最も印象的に無産党の進
 出に於て表示したる後わず僅かに数日にして起こ
 った二・二六事件は、重要な地位にある数名
 の人物を襲撃し、遂に政変を惹起じゃつきするに至つ
 た。

二

たお

先まず吾々われわれは、へ残酷なる銃剣の下に仆れ
 たる齋藤内大臣、高橋大蔵大臣、渡辺教育総
 監に対して、深厚なる弔意を表示すべき義務
 を感ずる。浜口雄幸おさち、井上準之助いぬかいつよし、犬養毅等
 数年来暴力の犠牲となつた政治家は少なくな

いが、是等の人々が仆れたる時は、まだ反対
 思想が何であるかが明白ではなかった、従つ
 てその死は言葉通りに不慮の死であった。然
 るに五・一五事件以来ファツシズム殊にへ軍
 部へ内に於けるファツシズムは、掩うべから
 ざる公然の事実となつた。而して今回災禍に
 遭遇したる数名の人々は此のファツシズム的
 傾向に抗流することを意識目的とし、その死
 が或は起こりうることを予知したのであるう
 而も彼等は来らんとする死に直面しつつ、身
 を以てファツシズムの潮流を阻止せんとした
 のである。筆者は之等の人々を個人的に知ら
 ず、知る限りに於て彼等と全部的に思想を同
 じくするものではない。然しファツシズムに
 対抗する一点に於ては、彼等は吾々の老いた
 る同志である。動もすれば退嬰保身に傾かん
 とする老齡の身を以て、危険を覚悟しつつそ
 の所信を守りたる之等の人々が、不幸兇刃に
 仆るとの報を聞けるとき、私は云い難き深刻
 の感情の胸中に渦巻けるを感じた。

三

ファツシストの何よりも非なるは、一部少
 数のものがじゅうりんへ暴へ力を行使して、国民多数の
 意志を蹂躪するに在る。国家に対する忠愛の
 熱情と国政に対する識見とに於て、生死を賭と
 して所信を敢行する勇氣とに於て、彼等のみ
 が決して独占的の所有者ではない。吾々は彼
 等の思想が天下の壇場に於て討議されたこと
 を知らない。況いわんや吾々は彼等に比してへ敗
 へ北したことの記憶を持たない。然るに何の
 理由を以て、彼等は独り自説を強行するので
 あるか。

彼等の吾々と異なる所は、唯ただ彼等が暴力を
 所有し吾々が之を所有せざることのみなにゆえに在る
 だが偶然にも暴力を所有することが、何故に
 自己のみの所信を敢行しうる根拠となるか。
 吾々に代わって社会の安全を保持する為たに、
 一部少数のものは武器を持つことを許されそ

の故に吾々は法規によつて武器を持つことを
 禁止されている。然るに吾々が晏如あんじょとして眠
 れる間に武器を持つことその事の故のみで、
 吾々多数の意志は無の如くごとに踏み付けられる
 ならば、先ず公平なる暴力を出発点として、
 吾々の勝敗を決せしめるに如くしはない。

或は人あつていかも知れない、手段に於
 て非であろうとも、その目的の革新的なる事
 に於て必ずしも咎とがめるをえないと。然し彼等
 の目的が何であるかは、未だ曾いまて吾々に明示かつ

されてはいない。何等か革新的であるかの印
 象を与えつつ、而もその内容が不明なること
 が、ファツシズムが一部の人を牽引けんいんする秘訣ひけつ
 なのである。それ自身異なる目的を抱くもの
 が、夫々それぞれの希望をファツシズムに投影して、
 自己満足に陶醉しているのである。只管ひたすらに現
 状打破を望む性急焦躁しょうそうのものが、往ゆくべき方
 向の何たるかを弁ずるをえずして、曩さきにコン
 ムユニズムに狂奔し今はファツシズムに傾倒
 す。冷静な理智の判断を忘れたる現代に特異

の病弊である。

四

由来国軍は外敵に対して我が国土を防衛する任務を課せられて、国軍あるが為めに国民は自ら武器を捨て、安んじて国土の防衛を托したのである。

国軍はそれだけで負担し切れぬほど重大な使命を持っている。将兵化して政治家となる

ほどに、国軍は為すべき任務を欠いているのであるうか。若しその任務たる国防を全うするをえない事情にあるならば、真摯にその旨を訴えるべき他の適当の方法がある筈である。日本国民はその言に耳を傾けないほど祖国に対して冷淡無関心ではない、若しそれが国防の充実と云う特殊の任務を逸脱して、一般国政に容喙するならば、その過去と現在の生活環境とよりして、決して充分の資格条件を具備するものと云うことは出来ない。軍人は軍

人としての特殊の観点に制約されざるをえないのである。

軍人その本務を逸脱して余事に奔走すること、既に好ましくないが、更に憂うべきことは、軍人が政治を左右する結果は、若し一度戦争の危機に立つ時、国民の中には、戦争が果たして必至の運命によるか、或は何らかの為にする結果かと云う疑惑を生ずるであろう。国家の運命が危険に迫れる時に於て、拳国満心の結束を必要とする時に於て、かかる疑惑ほど障碍しょうがいとなるものはない。

五

一千数百名の将兵をして勅命違反の叛軍はんぐんたらしめんとするに至れるは、果たして誰の責任であろうか。事件は突如として今日現れたのではなくて、由よつて来れる所遠きに在る。満洲事変まんしゅう以来擡頭たいとうし来れるファッシズムに対して、若しへ軍部へにその人あらば、夙つとに英

断を以て抑止すべきであった。

国軍の本務は国防に在るかなへん奈辺に在るか、

政治は国民の総意に依るよべきか一部少数のへ

暴へ力に依るべきかは、厳として対立する見

解にして、その間何等の妥協苟合こうこうを許されな

い。若し対立する見解の一方を採るならば、

その所信に於て貫徹を期すべきである。所謂いわゆる

責任と称してその都度職を辞するが如きは、

其の意味の責任を果たさざるものである。幸

いにして此の機を利用して、抜本塞源そくげんの英断

を行うもの国軍の中より出現するに非あずんば

更にへ幾度か此の不祥事を繰り返すに止まへ

るであろう。

六

左翼戦線が十数年来無意味の分裂抗争に、

時間と精力とを浪費したる後、漸ようく暴力革命

主義を精算して統一戦線を形成したる時、右

翼の側に依然として暴力主義の迷夢が低迷し

つつある。

今や国民は国民の総意か一部の暴力かの、
 二者択一の分岐点に立ちつつある。此の最先
 の課題を確立すると共に社会の革新を行うに
 足る政党と人材とを議会に送ることが急務で
 ある。二月二十日の総選挙は、夫れ自身に於
 ては未だ吾々を満足せしめるに足りないが、
 日本の黎明は彼の総選挙より来るであろう。
 黎明は突如として捲き起これる妖雲によつて
 暫くは閉ざされようとも、吾々の前途の希望
 は依然として彼処に係っている。

此の時に当たり往々にして知識階級の囁く
 を聞く、此のへ暴^レ力の前にいかに吾々の無
 力なることよと、だが此の無力感の中には、
 暗に暴力讚美の危険なる心理が潜んでいる、
 そして之こそファツシズムを醸成する温床で
 ある。暴力は一時世を支配しようとも、暴力
 自体の自壊作用によりて瓦壊する。真理は一
 度地に塗れようとも、神の永遠の時は真理の
 ものである。此の信念こそ吾々が確守すべき

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、

青空文庫（<http://www.aozora>

[ra.gr.jp/](http://www.aozora)）で作られました。入力

校正、制作にあたったのは、ボランティアの

皆さんです。

●表記について

・このファイルは W3C 勧告 XHTML

L1.1 にそった形式で作成されています

辺境文庫にてPDF製本

2007年7月27日作成